

李陵

中島敦



漢かんの武帝ぶていの天漢てんかん二年秋九月、騎都尉きとゐ・李陵りりやうは歩卒五千を率い、辺塞へんさい遮虜鄣しやりよしょうを発して北へ向かった。阿爾泰山脈アルタイの東南端が戈壁ゴビ沙漠さばくに没せんとする辺へんの磽确こうかくたる丘陵地帯を縫つて北行すること三十日。朔風さくふうは戎衣じゆういを吹いて寒く、いかにも万里孤軍来たるの感が深い。漠北ぼくほく・浚稽山しゆんけいざんの麓ふもとに至つて軍はようやく止営した。すでに敵匈奴ききやうどの勢力圏に深く進み入っているのである。秋とはいつても北地きたちのこととて、苜蓿うまじやしも枯れ、榆にれや檉柳かわやなぎの葉ももはや落ちつくしている。木の葉どころか、木そのものさえ（宿営地の近傍きんぼうを除いては）、容易に見つかからないほどの、ただ砂と岩かわらと磧かと、水のない河床との荒涼たる風景であつた。極目人煙を見ず、まれに訪れるものとは曠野こうやに水を求める羚羊かもしかぐらい

のものである。突兀とつこつと秋空を劃くぎる遠山の上を高く雁かりの列が南へ急ぐのを見ても、しかし、将卒一同誰だれ一人として甘い懐郷の情などに唆そそられるものはない。それほどに、彼らの位置は危険極きわまるものだったのである。

騎兵を主力とする匈奴に向かつて、一隊の騎馬兵をも連れずに歩兵ばかり（馬に跨またがる者は、陵とその幕僚ばくりょう数人にすぎなかつた）で奥地深く侵入することからして、無謀の極きわみというほかはない。その歩兵も僅わずか五千、絶えて後援はなく、しかもこの浚稽山しゅんけいざんは、最も近い漢塞かんさいの居延きよえんからでも優に一千五百里（支那里程）は離れている。統率者李陵への絶対的な信頼と心服とがなかつたならとうてい続けられるような行軍ではなかつた。

毎年秋風が立ちはじめると決きまつて漢の北辺には、胡馬こばに鞭むちうつた剽悍ひょうかんな侵略者の大部隊が現われる。辺吏が殺され、人民が掠かす

められ、家畜が奪略される。五原・朔方・雲中・上谷・雁門などが、その例年の被害地である。大將軍衛青・嫖騎將軍霍去病の武略によつて一時漠南に王庭なしといわれた元狩以後元鼎へかけの数年を除いては、ここ三十年來欠かすことなくこうした北辺の災いがつづいていた。霍去病が死んでから十八年、衛青が歿してから七年。浞野侯趙破奴は全軍を率いて虜に降り、光祿勳徐自為の朔北に築いた城障もたちまち破壊される。全軍の信賴を繋ぐに足る將帥としては、わずかに先年大宛を遠征して武名を挙げた貳師將軍李広利があるにすぎない。

その年——天漢二年夏五月、——匈奴の侵略に先立つて、貳師將軍が三万騎に將として酒泉を出た。しきりに西辺を窺う匈奴の右賢王を天山に撃とうというのである。武帝は李陵に命じてこの軍旅の輜重のことに当たらせようとした。未央宮の武台殿

に召見された李陵は、しかし、極力その役を免ぜられんことを請うた。陵は、飛將軍ひしやうぐんと呼ばれた名將李広りこうの孫。つとに祖父の風ありといわれた騎射きしやの名手で、数年前から騎都尉きとゐとして西辺の酒泉・張掖しゆせん ちやうえきに在あつて射しやを教え兵を練つていたのである。年齢もようやく四十に近い血氣盛りとあつては、輜重しちやうの役はあまりに情けなかつたに違ちがひない。臣が辺境に養うところの兵は皆荊楚けいその一騎当千の勇士なれば、願ねがわくは彼らの一隊を率りいて討うつて出いで、側面から匈奴の軍を牽制けんせいしたいという陵の嘆願には、武帝うなずも頷うなずくところがあつた。しかし、相つづく諸方への派兵のため、あいにく、陵の軍に割きくべき騎馬の余力がないのである。李陵はそれでも構かまわぬといつた。確かに無理とは思おもわれたが、輜重しちやうの役などに当てられるよりは、むしろ己おのれのために身命を惜しまぬ部下五千とともに危あうきを冒おかすほうを選びたかつたので

ある。臣願わくは少をもつて衆を撃たんといつた陵の言葉を、  
派手好きはでな武帝は大いに欣よろこんで、その願いを容いれた。李陵は西、  
張掖ちようえきに戻かへつて部下の兵を勒ろくするとすぐに北へ向けて進発した。  
当時居延きよえんに屯たむろしていた彊弩都尉路博徳きやうどといろはくとくが詔を受けて、陵の軍を  
中道まで迎えに出る。そこまではよかつたのだが、それから先  
がすこぶる拙ますいことになつてきた。元来この路博徳ろはくとくという男は  
古くから霍去病かくきよへいの部下として軍に従い、祁離侯ふりこうにまで封ぜられ、  
ことに十二年前には伏波將軍ふくはとして十万の兵を率ないて南越なんえつを滅  
ぼした老将である。その後、法に坐ざして侯を失い現在の地位に  
墮おとされて西辺を守っている。年齢からいつても、李陵とは父子  
ほどに違う。かつては封侯ほうこうをも得たその老将がいまさら若い李  
陵りごときの後塵こうじんを拜するのがなんとしても不愉快だつたのであ  
る。彼は陵の軍を迎えると同時に、都へ使いをやつて奏上させ

た。今まさに秋とて匈奴きやうどの馬は肥え、寡兵かへいをもつてしては、騎馬戦を得意とする彼らの銳鋒えいほうには些いささか当たりがたい。それゆえ、李陵とともにここに越年し、春を待つてから、酒泉しゆせん・張掖ちやうえきの騎各五千をもつて出撃したほうが得策と信ずるといふ上奏文である。もちろん、李陵はこのことをしらない。武帝はこれを見ると酷ひどく怒つた。李陵が博徳と相談の上での上書と考えたのである。わが前ではあのとおり広言しておきながら、いまさら辺地に行つて急に怯氣おしげづくとは何事ぞという。たちまち使いが都から博徳と陵の所に飛ぶ。李陵は少をもつて衆を撃たんとわが前で広言したゆえ、汝なんじはこれと協力する必要はない。今匈奴せいがが西河に侵入したとあれば、汝なんじはさつそく陵を残して西河に馳はせつけ敵の道を遮さへぎれ、というのが博徳への詔である。李陵への詔には、ただちに漠北ぼくほくに至り東は浚稽山しゆんけいざんから南は竜勒水りやうろくすいの辺までを偵察観

望し、もし異状なくんば、泥野侯さくやこうの故道に従つて受降城じゆうじょうに至つて士を休めよとある。博徳と相談してのあの上書はいつたいなんたることぞ、という烈はげしい詰問きつもんのあつたことは言うまでもない。寡兵かへいをもつて敵地に徘徊はいかいすることの危険を別としても、なお、指定されたこの数千の行程は、騎馬を持たぬ軍隊にとつてははなはだむずかしいものである。徒歩のみによる行軍の速度と、人力による車の牽引けんいん力と、冬へかけての胡地こちの氣候とを考へれば、これは誰にも明らかであつた。武帝はけつして庸王ようおうではなかつたが、同じく庸王ではなかつた隋ずいの煬帝ようだいや始皇帝しこうていなどと共通した長所と短所とを有もつていた。愛寵あいちょう比なき李夫人りふじんの兄たる武師將軍ぶししにしてからが兵力不足のためいつたん、大宛だいえんから引揚げようとして帝の逆鱗ぎきりんにふれ、玉門関ぎよくもんかんをとじられてしまつた。その大宛征討も、たかだか善馬がほしいからとて思い立た

れたものであつた。帝が一度言出したら、どんな我儘わがままでも絶対に通されねばならぬ。まして、李陵の場合は、もともと自らみずか乞うた役割でさえある。(ただ季節と距離とに相当に無理な注文があるだけで)躊躇ちゆうちよすべき理由はどこにもない。彼は、かくて、「騎兵を伴わぬ北征」に出たのであつた。

浚稽山しゆんけいざんの山間には十日余留とじまつた。その間、日ごとに斥候せつこうを遠く派して敵状を探つたのはもちろん、附近の山川地形を剩あますところなく図に写しとつて都へ報告しなければならなかつた。報告書は麾下きかの陳歩樂ちんほらくという者が身に帯びて、单身都へ馳はせるのである。選ばれた使者は、李陵りりように一揖いちゆうしてから、十頭に足らぬ少数の馬の中の一匹に打跨うちまたがると、一鞭あてて丘を駈かけお下りた。灰色に乾いた漠々ぼくぼくたる風景の中に、その姿がしだいに小さくなつ

ていくのを、一軍の将士は何か心細い気持で見送った。

十日の間、浚稽山しゅんけいざんの東西三十里の中には一人の胡兵こへいをも見なかつた。

彼らに先だつて夏のうちに天山へと出撃した武師將軍ぶししはいつたん右賢王うけんおうを破りながら、その帰途別の匈奴きょうどの大軍に囲まれて惨敗さんぱいした。漢兵は十に六、七を討たれ、將軍の一身さえ危うかつたという。その噂うわさは彼らの耳にも届いている。李広利りこうりを破つたその敵の主力が今どのあたりにいるのか？ 今、因いん※將軍公孫敖こうそんごうが西河せいが・朔方さくほうの辺で禦ふせいでいる（陵りょうと手を分かつた路博徳ろはくとくはその応援に馳はせつけて行つたのだが）という敵軍は、どうも、距離と時間とを計ってみるに、問題の敵の主力ではなさそうに思われる。天山から、そんなに早く、東方四千里の河南かなん（オルド

ス)の地まで行けるはずがないからである。どうしても匈奴きょうどの主力は現在、陵の軍の止营地から北方しつぎやすい鄧居水までの間あたりに屯たむろしていなければならぬ。李陵自身毎日前山の頂に立つて四方を眺ながめるのだが、東方から南へかけてはただ漠々たる一面の平沙へいさ、西から北へかけては樹木に乏しい丘陵性の山々が連なっているばかり、秋雲の間にときときとして鷹たかか隼はやぶさかと思われる鳥の影を見ることはあつても、地上には一騎の胡兵こへいをも見ないのである。

山峡の疎林そりんの外はずれに兵車を並べて囲い、その中に帷幕いぼくを連ねた陣営である。夜になると、気温が急に下がった。士卒は乏しい木々を折取つて焚たいては暖をとつた。十日もいるうちに月はなくなつた。空気の乾いているせいか、ひどく星が美しい。黒々とした山影とすれすれに、夜ごと、狼星ろうせいが、青白い光芒こうぼうを斜め

に曳ひいて輝きらいでいた。十数日事なく過すごしたのち、明日はいよいよここを立退たちのいて、指定された進路を東南へ向かつて取ろうと決きめたその晩である。一人の歩哨ほしやうが見るともなくこの爛々らんらんたる狼星ろうせいを見上げていると、突然、その星のすぐ下の所にすこぶる大きい赤黄色い星が現あらわれた。オヤと思つていいるうちに、その見なれぬ巨おおきな星が赤く太い尾を引いて動ういた。と続ついて、二つ三つ四つ五つ、同じような光がその周囲に現あらわれて、動ういた。思おもわず歩哨ほしやうが声を立てようとしたとき、それらの遠くひの灯ひはフツと一時に消えた。まるで今見たことが夢だったかのように。

歩哨ほしやうの報告に接りした李陵りりやうは、全軍に命じて、明朝天明とともにただちに戦闘に入るべき準備を整えさせた。外に出で一応各部署を点検し終わると、ふたたび幕営に入り、雷らいのごとき鼾かんせい声

を立てて熟睡した。

翌朝李陵が目を醒まして外へ出て見ると、全軍はすでに昨夜の命令どおりの陣形をとり、静かに敵を待ち構えていた。全部が、兵車を並べた外側に出、戟と盾とを持った者が前列に、弓弩を手にした者が後列にと配置されているのである。この谷を挟んだ二つの山はまだ暁暗の中に森閑とはしているが、そここの巖蔭いわかげに何かのひそんでいるらしい気配けはいがなんとなく感じられる。

朝日の影が谷合にさしこんでくると同時に、（匈奴は、単于がまず朝日を拝したのちでなければ事を発しないのであろう。）今まで何一つ見えなかった両山の頂から斜面にかけて、無数の人影が一時に湧いた。天地を撼がす喊声とともに胡兵は山下に殺到した。胡兵の先登が二十歩の距離に迫ったとき、それまで

鳴りをしずめていた漢の陣営からはじめて鼓声こせいが響く。たちまち千弩せんどともに発し、弦に応じて数百の胡兵こへいはいつせいに倒れた。間髪かんはつを入れず、浮足立った残りの胡兵に向かつて、漢軍前列の持戟者じげきしやらが襲いかかる。匈奴きょうどの軍は完全に潰ついえて、山上へ逃げ上った。漢軍これを追撃して虜首りよしゆを挙げることに数千。

鮮あざやかな勝ちっぷりではあつたが、執念深い敵がこのままで退くことはけつしてない。今日の敵軍だけでも優に三万はあつたろう。それに、山上に靡なびいていた旗印から見れば、紛れもなく单于ぜんうの親衛軍である。单于がいるものとすれば、八万や十万の後詰ごづめの軍は当然繰出されるものと覚悟せねばならぬ。李陵は即刻この地を撤退して南へ移ることにした。それもここから東南二千里の受降城じゆうじょうじょうへという前日までの予定を変えて、半月前に辿たどつて来たその同じ道を南へ取つて一日も早くもとの居延塞きよえんさい

(それとて千数百里離れているが) に入ろうとしたのである。

南行三日めの午ひる、漢軍の後方はるか北の地平線に、雲のごとく黄塵こうじんの揚がるのが見られた。匈奴騎兵の追撃である。翌日はすでに八万の胡兵が騎馬の快速を利して、漢軍の前後左右を隙すきもなく取囲んでしまっていた。ただし、前日の失敗に懲こりたのみえ、至近の距離にまでは近づいて来ない。南へ行進して行く漢軍を遠巻きにしなから、馬上から遠矢を射かけるのである。李陵が全軍を停とめて、戦鬪の体形をとらせれば、敵は馬を駆つて遠く退き、搏はくせん戦を避ける。ふたたび行軍をはじめれば、また近づいて来て矢を射かける。行進の速度が著しく減ずるのとはもとより、死傷者も一日ずつ確実に殖ふえていくのである。飢え疲れた旅人の後をつける曠野こうやの狼のように、匈奴の兵はこの戦法を続けつつ執念深く追つて来る。少しずつ傷つけていった揚句あげく、

いつかは最後の止めを刺そうとその機会を窺っているのである。かつ戦い、かつ退きつつ南行することさらに数日、ある山谷の中で漢軍は一日の休養をとった。負傷者もすでにかなりの数に上っている。李陵は全員を点呼して、被害状況を調べたのち、傷のいか所にすぎぬ者には平生どおり兵器を執って闘わしめ、両創を蒙る者にもなお兵車を助け推さしめ、三創にしてはじめて輦に乗せて扶け運ぶことに決めた。輸送力の欠乏から屍体はすべて曠野に遺棄するほかはなかつたのである。この夜、陣中視察のとき、李陵はたまたまある輜重車中に男の服を纏うた女を発見した。全軍の車輛について一々調べたところ、同様にしてひそんでいた十数人の女が捜し出された。往年関東の群盜が一時に戮に遇ったとき、その妻子等が逐われて西辺に遷り住んだ。それら寡婦のうち衣食に窮するままに、辺境守備兵の妻と

なり、あるいは彼らを華客とする娼婦となり果てた者が少なくない。兵車中に隠れてはるばる漠北まで従い来たつたのは、そういう連中である。李陵は軍吏に女らを斬るべくカンタンに命じた。彼女らを伴い来たつた士卒については一言のふれるところもない。澗間の凹地に引出された女どもの疝高い号泣がしばらくつづいた後、突然それが夜の沈黙に吞まれたようにフツと消えていくのを、軍幕の中の将士一同は肅然たる思いで聞いた。

翌朝、久しぶりで肉薄来襲した敵を迎えて漢の全軍は思いきり快戦した。敵の遺棄屍体三千余。連日の執拗なゲリラ戦術に久しくいらだち屈していた士気が俄かに奮い立った形である。次の日からまた、もとの竜城の道に循つて、南方への退行が始まる。匈奴はまたしても、元の遠巻き戦術に還つた。五日め、漢軍は、平沙の中にときに見出される沼沢地の一つに踏入つた。

水は半ば凍り、泥濘でいねいも脛はぎを没する深さで、行けども行けども果  
てしない枯葦原かれあしはらが続く。風上かざかみに廻まわった匈奴の一隊が火を放った。  
朔風さくふうは焰ほのおを煽り、真昼の空の下に白つぼく輝きを失った火は、す  
さまじい速さで漢軍に迫る。李陵はすぐに附近の葦あしに迎え火を  
放たしめて、かろうじてこれを防いだ。火は防いだが、沮洳地そじよち  
の車行の困難は言語に絶した。休息の地のないままに一夜泥濘でいねい  
の中を歩き通したのち、翌朝ようやく丘陵地に辿たどりついたとた  
んに、先廻りさきまわして待伏せていた敵の主力の襲撃に遭あった。人馬  
入乱れての搏兵戦はくへいである。騎馬隊の烈はげしい突撃を避けるため、  
李陵は車を棄すてて、山麓さんろくの疎林の中に戦闘の場所を移し入れた。  
林間からの猛射はすこぶる効を奏した。たまたま陣頭れんどに姿を現  
わした单于ぜんうとその親衛隊とに向かつて、一時に連弩れんぶを発して乱  
射したとき、单于の白馬は前脚を高くあげて棒立ちとなり、青袍せいほう

をまとつた胡主こしゅはたちまち地上に投出された。親衛隊の二騎が馬から下りもせず、左右からさつと单于を掬すくい上げると、全隊がたちまちこれの中に困んですばやく退いて行つた。乱闘数刻のちようやく執拗しつような敵を撃退しえたが、確かに今までにない難戦であつた。遺された敵の屍体しかいはまたしても数千を算したが、漢軍も千に近い戦死者を出したのである。

この日捕えた胡虜こりよの口から、敵軍の事情の一端を知ることができた。それによれば、单于ぜんうは漢兵の手強てじわさに驚嘆し、己おのれに二十倍する大軍をも怯おそれず日に日に南下して我を誘うかに見えるのは、あるいはどこか近くに、伏兵があつて、それを恃たのんでいゝるのではないかと疑つてゐるらしい。前夜その疑いを单于が幹部の諸将に洩もらして事を計つたところ、結局、そういう疑いも確かにありうるが、ともかくも、单于自ら数万騎を率いて漢の

寡勢かぜいを滅しえぬとあつては、我々の面目に係わるといふ主戦論が勝ちを制し、これより南四、五十里は山谷がつづくがその間力戦猛攻し、さて平地に出て一戦してもなお破りえないとなつたそのときはじめて兵を北に還かえそうといふことに決まつたといふ。これを聞いて、校尉韓延年こうい かんえんねん以下漢軍の幕僚たちの頭に、あるいは助かるかもしれぬぞといふ希望のようなものが微かすかに湧わいた。

翌日からの胡軍こぐんの攻撃は猛烈を極めた。捕虜ほりよの言の中にあつた最後の猛攻というのを始めたのであろう。襲撃は一日に十数回繰返された。手厳てきびしい反撃を加えつつ漢軍は徐々に南に移つて行く。三日経たつと平地に出た。平地戦になると倍加される騎馬隊の威力にものを言わせ匈奴きようどらは遮しや二無二漢軍を圧倒しようとかかつたが、結局またも二千の屍体したいを遺のこして退いた。捕虜の

言が偽りでなければ、これで胡軍は追撃を打切るはずである。たかが一兵卒の言った言葉ゆえ、それほど信頼できるとは思わなかつたが、それでも幕僚一同些（ばくりよう）かホツとしたことは争えなかつた。

その晩、漢の軍侯、管敢（ぐんこう かんかん）という者が陣を脱して匈奴の軍に亡（に）げ降（くだ）つた。かつて長安都下の悪少年だつた男だが、前夜斥候上（せつこう）の手拔かりについて校尉・成安侯韓延年（せいあんこう かんえんねん）のために衆人の前で面罵（めんば）され、笞打（むち）たれた。それを含んでこの拳に出たのである。先日（たにま）溪間（たにま）で斬（ざん）に遭つた女どもの一人が彼の妻だつたとも言ふ。管敢は匈奴の捕虜の自供した言葉を知つていた。それゆえ、胡陣（こじん）に亡（に）げて单于（ぜんう）の前に引出されるや、伏兵（おそ）を懼れて引上げる必要のないことを力説した。言う、漢軍には後援がない。矢もほとんど尽きようとしている。負傷者も続出して行軍は難渋（なんじゆう）を極めて

いる。漢軍の中心をなすものは、李將軍および成安侯韓延年の率いる各八百人だが、それぞれ黄と白との幟をもつて印としているゆえ、明日胡騎の精銳をしてそこに攻撃を集ませしめてこれを破つたなら、他は容易に潰滅するであらう、云々。单于は大いに喜んで厚く敢を遇し、ただちに北方への引上げ命令を取消した。

翌日、李陵韓延年りりようかんえんねんすみやかに降れと疾呼しつ、胡軍の最精銳は、黄白の幟を目ざして襲いかかった。その勢いに漢軍は、しだいに平地から西方の山地へと押されて行く。ついに本道から遙かに離れた山谷の間に追込まれてしまった。四方の山上から敵は矢を雨のごとくに注いだ。それに応戦しようにも、今や矢が完全に尽きてしまった。遮虜鄣しやりよしやうを出るとき各人が百本ずつ携えた五十万本の矢がことごとく射尽くされたのである。矢ばかりでは

ない。全軍の刀槍矛戟とうそうぼうげきの類も半ばは折れ欠けてしまった。文字どおり刀折れ矢尽きたのである。それでも、戟ほこを失つたものは車輻しゃふくを斬きつてこれを持ち、軍吏ぐんりは尺刀せきとうを手にして防戦した。谷は奥へ進むに従つていよいよ狭せまくなる。胡卒こそつは諸所の崖がけの上から大石を投下しはじめた。矢よりもこのほうが確実に漢軍の死傷者を増加させた。死屍ししと礮石るいせきとでもはや前進も不可能になつた。

その夜、李陵は小袖短衣しょうしゆうたんいの便衣べんいを着け、誰もついて来るなど禁じて独り幕営の外に出た。月が山の峽かいから覗のぞいて谷間うずたかに堆しかばねい屍しかばねを照らした。浚稽山しゆんけいざんの陣を撤するときには夜が暗かつたのに、またも月が明るくなりはじめたのである。月光と満地の霜とで片岡かたおかの斜面は水に濡ぬれたように見えた。幕営の中に残つた将士は、李陵の服装からして、彼が单身敵陣うかがを窺うかがつてあわよくば单于

と刺違える所存に違いないことを察した。李陵はなかなか戻つて来なかつた。彼らは息をひそめてしばらく外の様子を窺つた。遠く山上の敵壘から胡笳こかの聲が響く。かなり久しくたつてから、音もなく帷とほりをかかげて李陵が幕の内にはいつて来た。だめだ。と一言吐き出すように言うと、踞牀ぎよしように腰を下した。全軍斬死ざんしのほか、途みちはないようだと、またしばらくしてから、誰に向かつてともなく言つた。満座口を開く者はない。ややあつて軍吏ぐんりの一人が口を切り、先年泥野侯趙破奴さくやこうちようはどが胡軍こぐんのために生擒いけどられ、数年後に漢に亡にげ帰つたときも、武帝はこれを罰しなかつたことを語つた。この例から考えても、寡兵かへいをもつて、かくまで匈奴きょうどを震駭しんがいさせた李陵りりようであつてみれば、たとえ都へのがれ帰つても、天子はこれに遇する途みちを知りたもうであらうというのである。李陵はそれを遮おさえつて言う。陵一個のことはしばらく措おけ、とに

かく、今数十矢もあれば一応は囲みを脱出することもできようが、一本の矢もないこの有様では、明日の天明には全軍が坐して縛を受けるばかり。ただ、今夜のうちに囲みを突いて外に出、各自鳥獸と散じて走ったならば、その中にはあるいは辺塞に辿りついて、天子に軍状を報告しうる者もあるかもしれない。案ずるに現在の地点は鞬汗山北方の山地に違いなく、居延まではお数日の行程ゆえ、成否のほどはおぼつかないが、ともかく今となつては、そのほかに残された途はないではないか。諸將僚もこれに頷いた。全軍の將卒に各二升の糲と一個の冰片とが頒たれ、遮二無二、遮虜鄣に向かつて走るべき旨がふくめられた。さて、一方、ことごとく漢陣の旌旗を倒しこれを斬つて地中に埋めたのち、武器兵車等の敵に利用されうる惧れのあるものも皆打毀した。夜半、鼓して兵を起こした。軍鼓の音も慘として

響かぬ。李陵は韓校尉とともに馬に跨がり壮士十余人を従えて先登に立った。この日追い込まれた峡谷の東の口を破つて平地に出、それから南へ向けて走ろうというのである。

早い月はすでに落ちた。胡虜の不意を衝いて、ともかくも全軍の三分の二は予定どおり峡谷の裏口を突破した。しかしすぐに敵の騎馬兵の追撃に遭った。徒歩の兵は大部分討たれあるいは捕えられたようだったが、混戦に乗じて敵の馬を奪った数十人は、その胡馬に鞭うって南方へ走った。敵の追撃をふり切つて夜目にもぼつと白い平沙の上を、のがれ去つた部下の数を数えて、確かに百に余ることを確かめうると、李陵はまた峡谷の入口の修羅場にとつて返した。身には数創を帯び、自らの血と返り血とで、戎衣は重く濡れていた。彼と並んでいた韓延年はすでに討たれて戦死していた。麾下を失い全軍を失つて、もはや天子

に見ゆべき面目はない。彼は戟ほこを取直すと、ふたたび乱軍の中  
に駈入かけいった。暗い中で敵味方も分らぬほどの乱闘のうち、李  
陵の馬が流矢ながれやに当たったとみえてガツクリ前にのめった。それ  
とどちらが早かったか、前なる敵を突こうと戈ほこを引いた李陵は、  
突然背後から重量のある打撃を後頭部に喰くらつて失神した。馬か  
ら顛落てんらくした彼の上に、生擒いけどろうと構えた胡兵こへいどもが十重とえ二十重はたえ  
とおりに重なつて、とびかかった。

## 二

九月に北へ立った五千の漢軍かんぐんは、十一月にはいつて、疲れ傷  
ついて将を失った四百足らずの敗兵となつて辺塞へんさいに辿たどりついた。  
敗報はただちに駈伝えきでんをもつて長安ちやうあんの都に達した。

武帝ぶつていは思いのほか腹を立てなかつた。本軍たる李広利りこうりの大軍  
さえ惨敗ざんぱいしているのに、一支隊たる李陵の寡軍かぐんにたいした期待  
のもてよう道理がなかつたから。それに彼は、李陵が必ずや戦  
死しているに違いないとも思っていたのである。ただ、先ごろ  
李陵の使いとして漠北ぼくほくから「戦線異状なし、士気すこぶる旺盛おうせい」  
の報をもたらしした陳步楽ちんほらくだけは（彼は吉報の使者として嘉よみせら  
れ郎ろうとなつてそのまま都に留とどまつていた）成行上なりゆきどうしても自  
殺しなければならなかつた。哀れではあつたが、これはやむを  
得ない。

翌つぎ、天漢てんかん三年の春になつて、李陵は戦死したのではない。捕  
えられて虜ろに降つたのだという確報が届いた。武帝ははじめて  
嚇怒かくどした。即位後四十余年。帝はすでに六十に近かつたが、気  
象の烈はげしさは壮時に超えている。神仙しんせんの説を好み方士巫覡ほうしふげきの類

を信じた彼は、それまでに己おのれの絶対に尊信する方士どもに幾度か欺あざむかれていた。漢の勢威の絶頂に当たつて五十余年の間君臨したこの大皇帝は、その中年以後ずっと、靈魂の世界への不安な関心に執拗しつようにつきまとわれていた。それだけに、その方面での失望は彼にとって大きな打撃となつた。こうした打撃は、生来かつたつ闊達かつたつだつた彼の心に、年とともに群臣への暗い猜疑さいぎを植えつけていった。李蔡りさい・青霍せいかく・趙周ちようしゆうと、丞相じようしやうたる者は相ついで死罪に行なわれた。現在の丞相こうそんがたる公孫賀のごとき、命を拝したとき己おのが運命を恐れて帝の前で手離して泣出したほどである。硬骨漢こうこつかんきゆうあん汲黯きふんが退いた後は、帝を取巻くものは、佞臣ねいしんにあらずんば酷吏こくりであつた。

さて、武帝は諸重臣を召して李陵の処置について計つた。李陵の身体は都にはないが、その罪の決定によつて、彼の妻子眷属けんぞく

家財などの処分が行なわれるのである。酷吏として聞こえた一廷尉ていゐが常に帝の顔色を窺うかがい合法的に法を枉まげて帝の意を迎えることに巧みであつた。ある人が法の權威を説いてこれを詰なつたところ、これに答えていう。前主の是ぜとするところこれが律りつとなり、後主の是とするところこれが令りようとなる。当時の君主の意のほかになんの法があろうぞと。群臣皆この廷尉の類であつた。丞相じやうしやう公孫賀こうそんが、御史大夫ぎよしたいふ杜周としゆう、太常たいじやう、趙弟ちやうてい以下、誰一人として、帝の震怒しんどを犯してまで陵のために弁じようとする者はない。口を極めて彼らは李陵の売国的行為ののしを罵る。陵のごとき変節漢へんせつかんと肩を比べて朝ちやうに仕えていたことを思うといまさらながら愧はずかしと言出した。平生の陵の行為の一つ一つがすべて疑わしかつたことに意見が一致した。陵の従弟いとこに当たる李敢りかんが太子の寵ちやうを頼んで驕恣きやうしであることまでが、陵への誹謗ひぼうの種子になつた。口

を緘かんして意見を洩もらさぬ者が、結局陵に対して最大の好意を有もつものだったが、それも数えるほどしかない。

ただ一人、苦々しい顔をしてこれらを見守っている男がいた。

今口を極めて李陵を讒誣ざんぶしているのは、数か月前李陵が都を辞するときさかずきに盃さかずきをあげて、その行を壮さかんにした連中ではなかつたか。漠北ぼくほくからの使者が来て李陵の軍の健在を伝えたとき、さすがは名将李広りこうの孫と李陵の孤軍奮闘を讃たたえたのもまた同じ連中ではないのか。恬てんとして既往を忘れたふりのできる顯官連けんかんや、彼らの諂諛てんゆを見破るほどに聡明そうめいではありながらなお真実に耳を傾けることを嫌きらう君主が、この男には不思議に思われた。いや、不思議ではない。人間がそういうものとは昔からいやになるほど知ってはいるのだが、それにしてもその不愉快さに変わりはないのである。下大夫かたいふの一人として朝ちようにつらなっていたために

彼もまた下問を受けた。そのとき、この男はハッキリと李陵を褒め上げた。言う。陵の平生を見るに、親に事えて孝、士と交わって信、常に奮って身を顧みずもつて国家の急に殉ずるは誠に国士のふうありというべく、今不幸にして事一度破れたが、身を全うし妻子を保んずることをのみただ念願とする君側の佞人ばらが、この陵の一失を取上げてこれを誇大歪曲しもつて上の聡明を蔽おうとしているのは、遺憾この上もない。そもそも陵の今回の軍たる、五千にも満たぬ歩卒を率いて深く敵地に入り、匈奴数万の師を奔命に疲れしめ、転戦千里、矢尽き道窮まるに至るもなお全軍空弩を張り、白刃を冒して死闘している。部下の心を得てこれに死力を尽くさしむること、古の名将といえどもこれには過ぎまい。軍敗れたりとはいえ、その善戦のあととはまさに天下に顕彰するに足る。思うに、彼が死せずして虜に降つ

たというのも、ひそかにかの地にあつて何事か漢に報いんと期してのことではあるまいか。……

並いる群臣は驚いた。こんなことのいえる男が世にしようとは考えなかつたからである。彼らはこめかみを顛ふるわせた武帝の顔を恐る恐る見上げた。それから、自分らをあえて全軀保妻子くをまつとうしさいしをたもつの臣と呼んだこの男を待つものが何であるかを考えて、ニヤリとするのである。

向こう見ずなその男——太史令たいしれい・司馬遷しばせんが君前を退くと、すぐに、全軀保妻子くをまつとうしさいしをたもつの臣の一人が、遷せんと李陵りりようとの親しい關係について武帝の耳に入れた。太史令は故ゆえあつて弑師將軍じしと隙げきあり、遷が陵を褒ほめるのは、それによつて、今度、陵に先立つて出塞しゅつさいして功のなかつた弑師將軍おとしを陥おとしれんがためであると言う者も出てきた。ともかくも、たかが星曆卜祀せいれきぼくしを司つかさどるにすぎぬ太

史令の身として、あまりにも不遜な態度だというのが、一同の一致した意見である。おかしなことに、李陵の家族よりも司馬遷のほうが先に罪せられることになった。翌日、彼は廷尉に下された。刑は宮と決まった。

支那で昔から行なわれた肉刑の主なるものとして、黥、劓（はなきる）、剕（あしきる）、宮、の四つがある。武帝の祖父・文帝のとき、この四つのうち三つまでは廃せられたが、宮刑のみはそのまま残された。宮刑とはもちろん、男を男でなくする奇怪な刑罰である。これを一に腐刑ともいうのは、その創が腐臭を放つがゆえだともいい、あるいは、腐木の実を生ぜざるがごとき男と成り果てるからだともいう。この刑を受けた者を閹人と称し、宮廷の宦官の大部分がこれであったことは言うまでもない。人もあろうに司馬遷がこの刑に遭ったのである。しかし、

後代の我々が史記しきの作者として知っている司馬遷は大きな名前だが、当時の太史令たいしれい司馬遷は眇びょうたる一文筆の吏りにすぎない。頭脳めいせきの明晰なことは確かとしてもその頭脳に自信をもちすぎた、人づき合いの悪い男、議論ぎろんにおいてけっして他人ひとに負けない男、たかだか強情我慢の偏窟人へんくつじんとしてしか知られていなかった。彼が腐刑ふけいに遇あつたからとて別に驚く者はない。

司馬氏は元周もとしゅうの史官であった。後、晋しんに入り、秦しんに仕え、漢かんの代となつてから四代目の司馬談しばたんが武帝に仕えて建元年間けんげんに太史令たいしれいをつとめた。この談が遷の父である。専門たる律・曆れき・易えきのほか道家の教えに精くわしくまた博ひろく儒じゆ、墨ぼく、法ほう、名めい、諸家しよかの説にも通じていたが、それらをすべて一家の見けんをもつて綜すべて自己のものとしていた。己おのれの頭脳や精神力についての自信の強さはそっくりそのまま息子むすこの遷うけつに受嗣うけつがれたところのもので

ある。彼が、息子に施した最大の教育は、諸学の伝授を終えてのちに、海内かいだいの大旅行をさせたことであつた。当時としては変わった教育法であつたが、これが後年の歴史家司馬遷に資するところのすこぶる大であつたことは、いうまでもない。

元封元年げんぽうに武帝が東、泰山たいざんに登つて天を祭つたとき、たまたま周南しゅうなんで病床にあつた熱血漢司馬談は、天子始めて漢家の封ほうを建つるめでたきときに、己おのれ一人従つてゆくことのできぬのを慨なげき、憤を發してそのため死んだ。古今を一貫せる通史つうしの編述こそは彼の一生の念願だつたのだが、単に材料の蒐集しゅうしゅうのみで終わつてしまつたのである。その臨終りんじゆうの光景は息子・遷せんの筆によつて詳しく史記しきの最後の章に描かれている。それによると司馬談は己おのれのまた起たちがたきを知るや遷を呼びその手を執とつて、懇ねんじろに修史しゅうしの必要を説き、己おのれ太史たいたしとなりながらこのことに着手せず、

賢君忠臣の事蹟じせきを空むなしく地下に埋うめしめる不甲斐ふがなさを慨なげいて泣いた。「予死よせば汝なんじ必ず太史たishiとならん。太史たishiとならばわが論著ろんしやくせんと欲ほつするところを忘わするるなかれ」といい、これこそ己おのれに對する孝の最大さいだいなものだとして、爾なんじそれ念おもえやと繰返くりかしたとき、遷うつりは俯首ふしゆりゆうてい流涕りゆうていしてその命いのちに背そむかざるべきを誓ちかつたのである。

父ちちが死しんでから二年にののち、はたして、司馬しばせん遷うつりは太史たishi令れいの職しやくを継ついだ。父ちちの蒐集しゆうしゆうした資料しりょうと、宮廷きゆうてい所藏しよざうの秘冊ひさくとを用もちいて、すぐにも父子ふしそうでん相伝さうでんの天職てんしやくにとりかかりたかつたのだが、任官にんくわん後の彼かにまず課かせられたのは曆れきの改正かうせいという事業じぎやうであつた。この仕事しごとに没頭もつとうすることちようど満四年まんしよ。太初元年たいしよにようやくこれを仕上しじやうげると、すぐに彼は史記しきの編纂へんさんに着手てしゆした。遷うつり、ときに年四十二。

腹案ふくあんはとうにでき上がつていた。その腹案ふくあんによる史書ししよの形式けいしき

は従来の史書のどれにも似ていなかった。彼は道義的批判の規準を示すものとしては春秋を推したが、事実を伝える史書としてはなんとしてもあきたらなかつた。もつと事実が欲しい。教訓よりも事実が。左伝や国語になると、なるほど事実はある。左伝の叙事の巧妙さに至つては感嘆のほかはない。しかし、その事実を作り上げる一人一人の人についての探求がない。事件の中における彼らの姿の描出は鮮やかであつても、そうしたことをしでかすまでに至る彼ら一人一人の身許調べの欠けているのが、司馬遷には不服だつた。それに従来の史書はすべて、当代の者に既往をしらしめることが主眼となつていて、未来の者に当代を知らしめるためのものとしての用意があまりに欠けすぎているようである。要するに、司馬遷の欲するものは、在来（しんらい）の史には求めて得られなかつた。どういふ点で在来（しんらい）の史書があき

たらぬかは、彼自身でも自ら欲するところを書上げてみてはじめて判然する底のものと思われた。彼の胸中にあるモヤモヤと鬱積したものを書き現わすことの要求のほうに、在来の史書に對する批判より先に立つた。いや、彼の批判は、自ら新しいものを創るといふ形でしか現われないのである。自分が長い間頭の中で画いてきた構想が、史といえるものか、彼には自信はなかつた。しかし、史といえてもいえなくても、とにかくそういうものが最も書かれなければならないものだ（世人にとつて、後代にとつて、なかんずく己自身にとつて）という点については、自信があつた。彼も孔子に倣つて、述べて作らぬ方針をとつたが、しかし、孔子のそれとはたぶん内容に異にした述而不作である、司馬遷にとつて、単なる編年体の事件列挙はいまだ「述べる」の中にはいらぬものだったし、また、後世人の事実そのも

のを知ることを妨げるような、あまりにも道義的な断案は、むしろ「作る」の部類にはいるように思われた。

漢が天下を定めてからすでに五代・百年、始皇帝の反文化政策によつて湮滅いんめつしあるいは隠匿いんとくされていた書物がようやく世に行なわれはじめ、文ぶんの興おこらんとする気運が鬱勃うつぱつとして感じられた。漢の朝廷ばかりでなく、時代が、史しの出現を要求しているときであつた。司馬遷しばせん個人としては、父の遺囑いしよくによる感激が学殖・観察眼・筆力の充実を伴つてようやく渾然こんぜんたるものを生み出すべく醜酵はっこうしかけてきていた。彼の仕事は実に気持よく進んだ。むしろ快調に行きすぎて困るくらいであつた。というのは、初めごていほんぎの五帝本紀から夏殷周秦本紀あたりまでは、彼も、材料を按排あんばいして記述の正確厳密を期する一人の技師に過ぎなかつたのだが、始皇帝を経て、項羽本紀にはいるころから、その技術家

の冷静さが怪しくなつてきた。ともすれば、項羽が彼に、あるいは彼が項羽すなわにのり移りかねないのである。

項王則すなわち夜起キテ帳中ニ飲ス。美人有リ。名ハ虞ぐ。常ニ幸セラレテ従フ。駿馬しゅんめ名ハ騅すい、常ニ之これニ騎ス。是ここニ於おいテ項王すなわ乃チ悲歌こが慷慨がいシ自ラ詩ヲ為リテ曰ク「力山ヲ拔キ氣世ヲ蓋フ、時利アラズ騅逝カズ、騅逝カズ奈何スベキ、虞ヤ虞ヤ若なんじヲ奈何いかニセン」ト。歌フコト数闋けつ、美人之ニ和ス。項王泣なみだ数行下ル。左右皆泣キ、能ク仰ギ視ルモノ莫シ……。

これでいいのか？ と司馬遷は疑う。こんな熱に浮かされたような書きっぷりでいいものだろうか？ 彼は「作ル」ことを極度に警戒した。自分の仕事は「述ベル」ことに尽きる。事実、彼は述べただけであつた。しかしなんと生氣澆刺はつらつたる述べ方であつたか？ 異常な想像的視覚を有つた者でなければとうてい

不能な記述であつた。彼は、ときに「作ル」ことを恐れるのあまり、すでに書いた部分を讀返して見て、それあるがために史上の人物が現実の人物のごとくに躍動すると思われる字句を削る。すると確かにその人物はハツラツたる呼吸を止める。これで、「作ル」ことになる心配はないわけである。しかし、（と司馬遷が思うに）これでは項羽が項羽でなくなるではないか。項羽も始皇帝も楚の莊王もみな同じ人間になつてしまふ。違つた人間を同じ人間として記述することが、何が「述べる」だ？ 「述

べる」とは、違つた人間は違つた人間として述べることではないか。そう考えてくると、やはり彼は削つた字句をふたたび生かさなないわけにはいかない。元どおりに直して、さて一讀してみて、彼はやつと落ちつく。いや、彼ばかりではない。そこにかかれた史上の人物が、項羽や樊噲や范增が、みんなようやく

安心してそれぞれの場所に落ちつくように思われる。

調子のよいときの武帝は誠まことに高邁闊達こうまいかつたつな・理解ある文教の保護者だったし、太史令たいしれいという職が地味な特殊な技能を要するものだったために、官界につきものの朋党ほうとう比周ひしゅうの擠陥せいかん讒誣ざんぶによる地位（あるいは生命）の不安定からも免れることができた。

数年の間、司馬遷は充実した・幸福とっていい日々を送った。（当時の人間の考える幸福とは、現代人のそれと、ひどく内容の違うものだったが、それを求めることに変わりはない。）妥協性はなかったが、どこまでも陽性で、よく論じよく怒りよく笑いなかんずく論敵を完膚かんぷなきまでに説破せいはすることを最も得意としていた。

さて、そうした数年ののち、突然、この禍わざわいが降くだったのである。

薄暗い蚕室さんしつの中で——腐刑ふけい施術後当分の間は風に当たることを避けねばならぬので、中に火を熾おこして暖かに保った・密閉した暗室を作り、そこに施術後の受刑者を数日の間入れて、身体を養わせる。暖かく暗いところが蚕を飼う部屋に似ているとて、それを蚕室と名づけるのである。——言語を絶した混乱のあまり彼は茫然ぼうぜんと壁によりかかった。憤激よりも先に、驚きのようなものさえ感じていた。斬ざんに遭あうこと、死を賜たまうことに対してなら、彼にはもとより平生から覚悟ができていた。刑死けいしする己おのれの姿なら想像してみることもできるし、武帝の気に逆らつて李陵りりようを褒ほめ上げたときもまかりまちがえば死を賜うようなことになるかもしれないくらいの懸念けんねんは自分にもあつたのである。ところが、刑罰も数ある中で、よりによつて最も醜陋しゆうろうな宮刑きゆうけいにあおうとは！ 迂闊うかつといえは迂闊だが、（というのは、死刑を予期する

くらいなら当然、他のあらゆる刑罰も予期しなければならぬわけだから）彼は自分の運命の中に、不測の死が待受けているかもしれない。彼は考えていたけれども、このような醜いものが突然現われようとは、全然、頭から考えもしなかったのである。常々、彼は、人間にはそれぞれその人間にふさわしい事件しか起こらないのだという一種の確信のようなものを有つていた。これは長い間史実を扱っているうちに自然に養われた考えであった。同じ逆境にしても、慷慨の士には激しい痛烈な苦しみが、軟弱の徒には緩慢なじめじめした醜い苦しみが、というふうにある。たとえば始めは一見ふさわしくないように見えても、少なくともその後の対処の仕方によってその運命はその人間にふさわしいことが判つてくるのだと。司馬遷は自分を男だと信じていた。文筆の吏ではあつても当代のいかなる武人よりも男で

あることを確信していた。自分ではかりではない。このことだけには、いかに彼に好意を寄せぬ者でも認めないわけにはいかないうのであった。それゆえ、彼は自らの持論に従つて、車裂くるまざきの刑なら自分の行く手に思い画えがくことができたのである。それがよわい齡五十に近い身で、この辱はずかしめにあおうとは！ 彼は、今自分が蚕室さんしつの中にいるということが夢のような気がした。夢だと思いたかつた。しかし、壁によつて閉じていた目を開くと、うす暗い中に、生氣のない・魂までが抜けたような顔をした男が二、四人、だらしなく横たわつたりすわつたりしているのが目にはいった。あの姿が、つまり今の己なのだと思つたとき、嗚咽おえつとも怒号どごうともつかない叫びが彼の咽喉のどを破つた。

痛憤はんもんと煩悶との数日のうちには、ときに、学者としての彼の習慣からくる思索が——反省が来た。いつたい、今度の出来事

の中で、何が——誰が——誰のどういふところが、悪かつたのだという考えである。日本の君臣道とは根柢こんていから異なつた彼の国のこととて、当然、彼はまず、武帝を怨うらんだ。一時はその怨懣えんまんだけで、いつさい他を顧みる余裕はなかつたというのが實際であつた。しかし、しばらくの狂乱の時期の過ぎたあとには、歴史家としての彼が、目覚めてきた。儒者じゆしゃと違つて、先王の価値にも歴史家的な割引をすることを知っていた彼は、後王たる武帝の評価の上にも、私怨しえんのために狂いを来たさせることはなかつた。なんといつても武帝は大君主である。そのあらゆる欠点にもかかわらず、この君がある限り、漢の天下は微動けいどうだもしない。高祖はしばらく措おくとするも、仁君文帝じんくんぶんていも名君景帝けいていも、この君に比べれば、やはり小さい。ただ大きいものは、その欠点までが大きく写つてくるのは、これはやむを得ない。司馬遷しばせんは極度

の憤怨ふんえんのうちにあつてもこのことを忘れてはいない。今度のこ  
とは要するに天の作なせる疾風暴雨霹靂へきれきに見舞われたものと思う  
ほかはないという考えが、彼をいつそう絶望的な憤りいきどおへと驅かつ  
たが、また一方、逆に諦観ていかんへも向かわせようとする。怨恨えんこんが長  
く君主に向かい得ないとなると、勢い、君側の姦臣かんしんに向けられ  
る。彼らが悪い。たしかにそうだ。しかし、この悪さは、すこぶ  
る副次的な悪さである。それに、自矜心じきようしんの高い彼にとつて、彼  
ら小人輩しょうじんはいは、怨恨の対象としてさえ物足りない気がする。彼は、  
今度ほど好人物こうにんぶつというものへの腹立ちを感じたことはない。こ  
れは姦臣かんしんや酷吏こくりよりも始末が悪い。少なくとも側かたわらから見ている  
腹が立つ。良心的に安つぽく安心しており、他にも安心させる  
だけ、いつそう怪けしからぬのだ。弁護もしなければ反駁はんぱくもせぬ。  
心中、反省もなければ自責もない。丞じようしやう相公孫賀こうそんがのごとき、そ

の代表的なものだ。同じ阿諛あゆげいごう迎合を事としても、杜周としゅう（最近この男は前任者王卿おうけいを陥れてまんまと御史大夫ぎよしたいふとなりおおせた）のような奴やつは自らそれと知っているに違いないがこのお人好しの丞相ときた日には、その自覚さええない。自分にくをまつとうしさいしをたもつ全軀保妻子の臣といわれても、こういう手合いは、腹も立てないのだろう。こんな手合いは恨みを向けるだけの値打ちさえもない。

司馬遷は最後に忿懣ふんまんの持つて行きどころを自分に求めようとす。実際、何ものかに対して腹を立てなければならぬとすれば、結局それは自分自身に対してのほかはなかったのである。だが、自分のどこが悪かったのか？ 李陵りりょうのために弁じたこと、これはいかに考えてみてもまちがっていたとは思えない。方法的にも格別拙ますかつたとは考えぬ。阿諛あゆに墮だするに甘んじないかぎり、あれはあれでどうしようもない。それでは、自ら顧みて

やましくなければ、そのやましくない行為が、どのような結果を来たそうとも、士たる者はそれを甘受かんじゆしなければならぬはずだ。なるほどそれは一応そうに違いない。だから自分も肢解しかいされようと腰斬ようざんにあおうと、そういうものなら甘んじて受けるつもりなのだ。しかし、この宮刑きゆうけいは——その結果かく成り果てたわが身の有様というものは、——これはまた別だ。同じ不具でも足を切られたり鼻を切られたりするのは全然違った種類のものだ。士たる者の加えられるべき刑ではない。こればかりは、身体しんたいのこういう状態というものは、どういう角度から見ても、完全な悪だ。飾言しよくげんの余地はない。そうして、心の傷だけならば時とともに癒いえることもあるが、己おのが身体しんたいのこの醜悪な現実げんじつは死に至るまでつづくのだ。動機どうきがどうあろうと、このよ  
うな結果を招くものは、結局「悪かつた」といわなければなら

ぬ。しかし、どこが悪かった？ 己おのれのどこが？ どこも悪くなかった。己は正しいことしかしなかつた。強しいていえば、ただ、「我あり」という事実だけが悪かつたのである。

茫然ぼうぜんとした虚脱きよだつの状態ですわつていたかと思うと、突然飛上り、傷ついた獣のごとくうめきながら暗く暖かい室の中を歩き廻まわる。そうしたしぐさを無意識に繰返しつつ、彼の考えもまた、いつも同じ所をぐるぐる廻つてばかりいて帰結するところを知らないのである。

我を忘れ壁に頭を打ちつけて血を流したその数回を除けば、彼は自らを殺そうと試みなかつた。死にたかつた。死ねたらどんなによからう。それよりも数等恐ろしい恥辱が迫立てるのだから死をおそれる気持は全然なかつた。なぜ死ねなかつたのか？ 獄舎の中に、自らを殺すべき道具のなかつたことにもよろう。

しかし、それ以外に何か内から彼をとめる。はじめ、彼はそれがなんであるかに気づかなかつた。ただ狂乱と憤懣ふんまんとの中で、たえず発作的ほつさに死への誘惑を感じたにもかかわらず、一方彼の気持を自殺のほうへ向けさせたがらないものがあるのを漠然ぼくぜんと感じていた。何を忘れたのかはハッキリしないながら、とにかく何か忘れものをしたような気のすることがある。ちようどそんなぐあいであつた。

許されて自宅に帰り、そこで謹慎きんしんするようになってから、はじめ、彼は、自分がこの一月狂乱ひとにとり紛まぎれて己おのが畢生ひっせいの事業しゆじゆしたる修史しゆしのことを忘れ果てていたこと、しかし、表面は忘れていたにもかかわらず、その仕事への無意識の関心が彼を自殺から阻はばむ役目やくめを隠々いんいんのうちにつとめていたことに気がついた。十年前臨終りんじゆうの床とこで自分の手を取り泣いて遺命いめいした父の側々そくそくた

る言葉は、今なお耳底じていにある。しかし、今疾痛慘怛しつうさんたんを極めた彼の心の中に在あってなお修史の仕事を思い絶たしめないものは、その父の言葉ばかりではなかつた。それは何よりも、その仕事そのものであつた。仕事の魅力とか仕事への情熱とかいう怡たのしい、態ていのものではない。修史という使命の自覚には違いないとして、もさらに昂然こうぜんとして自らを恃じする自覚ではない。恐ろしく我がの強い男だつたが、今度のこととて、己おのれのいかにとるに足らぬものだつたかをしみじみと考えさせられた。理想の抱負みちぼたのと威張いばつてみたところで、所詮しよせん己は牛にふみつぶされる道傍みちぼたの虫けらのごときものにすぎなかつたのだ。「我」はみじめに踏みつぶされたが、修史という仕事の意義は疑えなかつた。このような浅ましい身と成り果て、自信も自恃じじも失いつくしたのち、それでもなお世にながらえてこの仕事に従うということは、どう考えて

も怡<sup>たの</sup>しいわけはなかつた。それはほとんど、いかにいとわしくとも最後までその關係を絶つことの許されない人間同士のような宿命的な因縁<sup>いんねん</sup>に近いものと、彼自身には感じられた。とにかくこの仕事のために自分は自らを殺すことができぬのだ（それも義務感からではなく、もつと肉体的な、この仕事との繋<sup>つな</sup>がりによつてである）ということだけはハッキリしてきた。

当座の盲目的な獣の呻<sup>うめ</sup>き苦しみに代わつて、より、意識的な・人間の苦しみが始まつた。困つたことに、自殺できないことが明らかになるにつれ、自殺によつてのほかに苦惱と恥辱とから逃れる途<sup>みち</sup>のないことがますます明らかになつてきた。一個の丈夫<sup>じょうふ</sup>たる太史<sup>たいし</sup>令司馬<sup>れいし</sup>遷<sup>せん</sup>は天漢<sup>てんかん</sup>三年の春に死んだ。そして、そののちに、彼の書残した史をつづける者は、知覚も意識もない一つの書写機械にすぎぬ、——自らそう思い込む以外に途<sup>みち</sup>はなかつた。

無理でも、彼はそう思おうとした。修史の仕事は必ず続けられねばならぬ。これは彼にとって絶対であった。修史の仕事のつづけられるためには、いかにたえがたくとも生きながらえねばならぬ。生きながらえるためには、どうしても、完全に身を亡きものと思ひ込む必要があつたのである。

五月ののち、司馬遷はふたたび筆を執つた。歡びも昂奮もない・ただ仕事の完成への意志だけに鞭打たれて、傷ついた脚を引摺りながら目的地へ向かう旅人のように、とぼとぼと稿を継いでいく。もはや太史令の役は免ぜられていた。些か後悔した武帝が、しばらく後に彼を中書令に取立てたが、官職の黜陟のごときは、彼にとつてもうなんの意味もない。以前の論客司馬遷は、一切口を開かずなつた。笑うことも怒ることもない。しかし、けつして悄然たる姿ではなかつた。むしろ、何か悪靈に

でも取り憑かれていたようなすさまじさを、人々は緘黙せる彼の風貌の中に見て取った。夜眠る時間をも惜しんで彼は仕事を つづけた。一刻も早く仕事を完成し、そのうえで早く自殺の自由を得たいとあせっているもののように、家人らには思われた。

凄惨な努力を一年ばかり続けたのち、ようやく、生きることの喜びを失いつくしたのちもなお表現することの喜びだけは生残りうるものだということを、彼は発見した。しかし、そのころになってもまだ、彼の完全な沈黙は破られなかつたし、風貌の中のすさまじさも全然和らげられはしない。稿をつづけていくうちに、宦者とか閹奴とかいいう文字を書かなければならぬところに来ると、彼は覚えす呻き声を発した。独り居室にいるときでも、夜、牀上に横になつたときでも、ふとこの屈辱の思いが萌してくると、たちまちカーツと、焼鏝をあてられるような

熱い疼くものが全身を駈けめぐる。彼は思わず飛上り、奇声を発し、呻きつつ四辺を歩きまわり、さてしばらくしてから齒をくいしばって己を落ちつけようと努めるのである。

## 三

乱軍の中に氣を失った李陵が獸脂を灯し獸糞を焚いた单于の帳房の中で目を覚ましたとき、咄嗟に彼は心を決めた。自ら首刎ねて辱しめを免れるか、それとも今一応は敵に従つておいてそのうちに機を見て脱走する——敗軍の責を償うに足る手柄を土産として——か、この二つのほかに途はないのだが、李陵は、後者を選ぶことに心を決めたのである。

单于は手ずから李陵の繩を解いた。その後の待遇も鄭重を極

めた。且鞮侯单于とて先代の响犁湖单于の弟だが、骨髄の逞しい巨眼赭髯の中年の偉丈夫である。数代の单于に従つて漢と戦つてはきたが、まだ李陵ほどの手強い敵に遭つたことはない。正直に語り、陵の祖父李広の名を引合ひに出して陵の善戦を讃めた。虎を格殺したり岩に矢を立てたりした飛將軍李広の驍名は今もなお胡地にまで語り伝えられている。陵が厚遇を受けるのは、彼が強き者の子孫でありまた彼自身も強かつたからである。食を頒けるときも強壯者が美味をとり老弱者に余り物を与えるのが匈奴のふうであつた。ここでは、強き者が辱しめられることはけつしてない。降将李陵は一つの穹廬と数十人の侍者とを与えられ賓客の礼をもつて遇せられた。

李陵にとつて奇異な生活が始まつた。家は絨帳穹廬、食物は羶肉、飲物は酪漿と獸乳と乳醋酒。着物は狼や羊や熊の皮を

綴り合わせた旃裘せんきゆう。牧畜と狩獵こうりやくと寇掠こうりやくと、このほかに彼らの生活はない。一望際涯いちぼうさいがいのない高原にも、しかし、河や湖や山々による境界があつて、单于直轄地ぜんうちよつかつちのほかは左賢王右賢王左谷蠡王右谷蠡王以下の諸王侯の領地に分けられており、牧民の移住はおのおのその境界の中に限られているのである。城郭もなければ田畑もない国。村落はあつても、それが季節に従い水草を逐つて土地を変える。

李陵には土地は与えられない。单于麾下きかの諸将とともにいつも单于に従つていた。隙すきがあつたら单于の首でも、と李陵は狙つていたが、容易に機会が来ない。たとい、单于を討果たしたとしても、その首を持って脱出することは、非常な機会に恵まれないかぎり、まず不可能であつた。胡地こちにあつて单于と刺違えたのでは、匈奴きようどは己おのれの不名誉を有耶無耶うやむやのうちに葬つてしまふ

こと必定ひつじょうゆえ、おそらく漢に聞こえることはあるまい。李陵は辛抱しんぼう強く、その不可能とも思われる機会の到来を待った。

单于ぜんうの幕下ぼつかには、李陵りりょうのほかにも漢の降人こうじんが幾人かいた。その中の一人、衛律えいりつという男は軍人ではなかったが、丁靈王ていれいおうの位を貰もらつて最も重く单于に用いられている。その父は胡人こじんだが、故ゆえあつて衛律は漢の都で生まれ成長した。武帝に仕えていたのだが、先年きょうりつ協律都尉李延年りえんねんの事に坐ざするのを懼おそれて、亡にげて匈奴きょうどに帰きしたのである。血が血だけに胡風こふうになじむことも速く、相当の才物でもあり、常に且鞮侯单于ぜんうの帷幄いあくに参じてすべての画策あずに与あつていた。李陵はこの衛律を始め、漢人かんじんの降くだつて匈奴の中にあるものと、ほとんど口をきかなかつた。彼の頭の中にある計画について事をもにすべき人物がいなと思われたのである。そういえば、他の漢人同士の間でもまた、互いに妙に

気まずいものを感じるらしく、相互に親しく交わることがないようであつた。

一度单于は李陵を呼んで軍略上の示教を乞うたことがある。それは東胡とうこに対しての戦いだったので、陵は快く己おのが意見を述べた。次に单于が同じような相談を持ちかけたとき、それは漢軍に対する策戦についてであつた。李陵はハッキリと嫌いやな表情をしたまま口を開こうとしなかつた。单于も強しいて返答を求めようとしなかつた。それからだいぶ久しくたつたころ、代・上郡を寇掠こうりやくする軍隊の一将として南行することを求められた。このときは、漢に対する戦いには出られない旨を言つてキツパリ断わつた。爾後じご、单于は陵にふたたびこうした要求をしなくなつた。待遇は依然として変わらない。他に利用する目的はなく、ただ士を遇するためには士を遇しているのだとしか思われない。

とにかくこの单于は男だと李陵は感じた。

单于の長子・左賢王さけんおうが妙に李陵に好意を示しはじめた。好意というより尊敬といったほうが近い。二十歳を越したばかりの・粗野そやではあるが勇氣のある真面目まじめな青年である。強き者への讚美さんびが、実に純粹で強烈なのだ。初め李陵のところへ来て騎射きしゃを教えてくれという。騎射きしゃといつても騎のほうは陵に劣らぬほど巧いうまい。ことに、裸馬らばを驅る技術に至つては遙かはるに陵を凌いしのいでいるので、李陵はただ射しゃだけを教えることにした。左賢王さけんおうは、熱心な弟子となつた。陵の祖父李広りこうの射における入神にゅうしんの技などを語るとき、蕃族ばんぞくの青年は眸ひとみをかがやかせて熱心に聞入るのである。よく二人して狩猟に出かけた。ほんの僅かわずの供廻りともまわを連れただけで二人は縦横に曠野こうやを疾駆しつクしては狐きつねや狼おおかみや羚羊かもしかや鷓鴣おほとりや雉子きじなどを射た。あるときなど夕暮れ近くなつて矢も尽きかけ

た二人が——二人の馬は供の者を遙かに駈抜いていたので——  
一群の狼に囲まれたことがある。馬に鞭うち全速力で狼群の中  
を駈け抜けて逃れたが、そのとき、李陵の馬の尻に飛びかかっ  
た一匹を、後ろに駈けていた青年左賢王が彎刀をもって見事に  
胴斬りにした。あとで調べると二人の馬は狼どもに噛み裂かれ  
て血だらけになっていた。そういう一日のち、夜、天幕の中  
で今日の獲物を羹の中あつものにぶちこんでフウフウ吹きながら啜ると  
き、李陵は火影に顔を火照らせた若い蕃王の息子に、ふと友情  
のようなものをさえ感じるこゝろがあつた。

天漢三年の秋に匈奴がまたもや雁門を犯した。これに酬いる  
とて、翌四年、漢は貳師將軍李広利に騎六万歩七万の大軍を授  
けて朔方を出でしめ、歩卒一万を率いた強弩都尉路博徳にこれ

を援けしめた。ひいて因※將軍公孫敖は騎一万歩三万をもつて雁門を、游擊將軍韓説は歩三万をもつて五原を、それぞれ進発する。近来にない大北伐である。单于是この報に接するや、ただちに婦女、老幼、畜群、資財の類をことごとく余吾水（ケルレ<sub>ン</sub>河）北方の地に移し、自ら十万の精騎を率いて李広利・路博徳の軍を水南の大草原に邀え撃つた。連戦十余日。漢軍はついに退くのやむなきに至つた。李陵に師事する若き左賢王は、別に一隊を率いて東方に向かい因※將軍を迎えてさんざんにこれを破つた。漢軍の左翼たる韓説の軍もまた得るところなくして兵を引いた。北征は完全な失敗である。李陵は例によつて漢との戦いには陣頭に現われず、水北に退いていたが、左賢王の戦績

2 「木十干」、39-13

3 「木十干」、39-18

をひそかに氣遣きづかつて己おのれを発見はつけんして愕然がくぜんとした。もちろん、全体としては漢軍の成功と匈奴きょうじの敗戦とを望んでいたには違いないが、どうやら左賢王だけは何か負けさせたくないと感じていたらしい。李陵はこれに気がついて激しく己を責めた。

その左賢王に打破られた公孫敖こうそんごうが都に帰り、士卒を多く失つて功がなかったとの廉かどで牢ろうに繋つながれたとき、妙な弁解をした。敵の捕虜ほりよが、匈奴軍の強いのは、漢から降くだつた李將軍りが常々兵を練り軍略を授けてもつて漢軍に備えさせているからだと言つたというのである。だからといって自軍が敗まけたことの弁解にはならないから、もちろん、因いん將軍かうの罪は許されなかったが、これを聞いた武帝が、李陵に対し激怒したことは言うまでもない。一度許されて家に戻っていた陵の一族はふたたび獄ごくに収め

られ、今度は、陵の老母から妻・子・弟に至るまでことごとく殺された。軽薄なる世人の常として、当時隴西ろうせい（李陵の家は隴西の出である）の士大夫したいふら皆李家を出したことを恥としたと記されている。

この知らせが李陵の耳に入ったのは半年ほど後のこと、辺境から拉致らちされた一漢卒かんそつの口からである。それを聞いたとき、李陵は立上がってその男の胸倉むなぐらをつかみ、荒々しくゆすぶりながら、事の真偽を今一度たしかめた。たしかにまちがいのないことを知ると、彼は齒をくい縛りしば、思わず力を両手にこめた。男は身をもがいて、苦悶くもんの呻きうめを洩もらした。陵の手が無意識のうちりようにその男の咽喉いんこうを扼やくしていたのである。陵が手を離すと、男はバツタリ地に倒れた。その姿に目もやらず、陵は帳房ちようぼうの外へ飛出した。

めちやくちやに彼は野を歩いた。激しい憤りが頭の中で渦を巻いた。老母や幼児のことを考えると心は灼けるようであったが、涙は一滴も出ない。あまりに強い怒りは涙を涸渇させてしまうのであろう。

今度の場合には限らぬ。今まで我が一家はそもそも漢から、どのような扱いを受けてきたか？ 彼は祖父の李広りこうの最期を思った。（陵の父、当戸とうこは、彼が生まれる数か月前に死んだ。陵はいわゆる、遺腹の児である。だから、少年時代までの彼を教育し鍛えあげたのは、有名なこの祖父であった。）名将李広は数次の北征に大功を樹たてながら、君側の姦佞かんねいに妨げられて何一つ恩賞にあずからなかった。部下の諸将がつぎつぎに爵位封侯しゃくゐほうこうを得て行くのに、廉潔れんけつな將軍だけは封侯はおろか、終始変わらぬ清貧せいひんに甘んじなければならなかった。最後に彼は大將軍衛青ゑいせいと衝突

した。さすがに衛青にはこの老将をいたわる気持はあつたのだが、その幕下ぼつかの一軍吏ぐんりが虎とらの威いを借りて李広りかを辱はずかしめた。憤激した老名将はすぐその場で——陣營みづかの中で自ら首刎はねたのである。祖父の死を聞いて声をあげてない少年の日の自分を、陵はいまだにハッキリと憶おぼえている。……

陵の叔父（李広の次男）李敢りかんの最後はどうか。彼は父將軍の惨みじめな死について衛青を怨うらみ、自ら大將軍の邸おもむに赴おもむいてこれを辱はずかしめた。大將軍の甥おいにあたる嫫騎將軍ひようき霍去病かくきよへいがそれを憤うらつて、甘泉宮の獵かんせんきぎゅうのときに李敢を射殺した。武帝はそれを知りながら、嫫騎將軍をかばわんがために、李敢は鹿しかの角に触れて死んだと発表させたのだ。……

司馬遷しばせんの場合と違つて、李陵のほうは簡単であつた。憤怒ふんぬがすべてであつた。（無理でも、もう少し早くかねての計画——单于ぜんう

の首でも持つて胡地こちを脱するとうい——を實行すればよかつた  
という悔いを除いては、)ただそれをいかにして現わすかが問題  
であるにすぎない。彼は先刻の男の言葉「胡地こちにあつて李將軍  
が兵を教え漢に備えていると聞いて陛下が激怒され云々うんぬん」を思  
出した。ようやく思い当たつたのである。もちろん彼自身には  
そんな覚えはないが、同じ漢の降將に李緒りしよという者がある。元、  
塞外都尉さいがいといとして奚侯城けいこうじやうを守つていた男だが、これが匈奴きやうどに降つ  
てから常に胡軍こぐんに軍略を授け兵を練つてゐる。現に半年前の軍  
にも、单于に従つて、(問題の公孫敖こうそんごうの軍とではないが)漢軍と  
戦つてゐる。これだと李陵りりやうは思った。同じ李將軍りしよで、李緒りしよとま  
ちがえられたに違ひないのである。

その晩、彼は单身、李緒の帳幕ちやうぼくへと赴いた。一言も言わぬ、一  
言も言わせぬ。ただの一刺しで李緒は斃たおれた。

翌朝李陵は单于の前に出て事情を打明けた。心配は要らぬと单于は言う。だが母の大関氏たいえんが少々うるさいから——というのは、相当の老齢でありながら、单于の母は李緒と醜関係があつたらしい。单于はそれを承知していたのである。匈奴きょうどの風習によれば、父が死ぬと、長子たる者が、亡父の妻妾さいしやうのすべてをそのまま引きついで己おのが妻妾とするのだが、さすがに生母だけはこの中にはいらない。生みの母に対する尊敬だけは極端に男尊女卑の彼らでも有もつているのである——今しばらく北方へ隠れていてもらいたい、ほとぼりがさめたところに迎えを遣やるから、とつけ加えた。その言葉に従つて、李陵は一時従者どもをつれ、西北の兜銜山とうかんざん（額林達班嶺がくりんたつばんれい）の麓ふもとに身を避けた。

まもなく問題の大関氏たいえんが病死し、单于ぜんうの庭ていに呼戻されたとき、李陵りりようは人間が変わつたように見えた。というのは、今まで漢に

対する軍略にだけは絶対に与らなかつた彼が、自ら進んでその相談に乗ろうと言出したからである。单于是この変化を見て大いに喜んだ。彼は陵を右校王うこうおうに任じ、己おのが娘の一人をめあわせた。娘を妻にという話は以前にもあつたのだが、今まで断わりつづけてきた。それを今度は躊躇ちゆうちよなく妻としたのである。ちようど酒泉張掖しゆせんちようえきの辺を寇掠こうりやくすべく南に出て行く一軍があり、陵は自ら請うてその軍に従つた。しかし、西南へと取つた進路がたまたま浚稽山しゆんけいざんの麓ふもとを過よぎつたとき、さすがに陵の心は曇つた。かつてこの地おのれで己に従つて死戦した部下どものことを考え、彼らの骨が埋められ彼らの血の染み込んだその砂の上を歩きながら、今の己が身の上を思うと、彼はもはや南行して漢兵と闘う勇氣を失つた。病と称して彼は独り北方へ馬を返した。

翌、太始元年、且鞮侯单于が死んで、陵と親しかつた左賢王が後を嗣いだ。狐鹿姑单于というのがこれである。

匈奴の右校王たる李陵の心はいまだにハッキリしない。母妻

子を族滅された怨みは骨髓に徹しているものの、自ら兵を率い

て漢と戦うことができないのは、先ごろの経験で明らかである。

ふたたび漢の地を踏むまいとは誓ったが、この匈奴の俗に化し

て終生安んじていられるかどうかは、新单于への友情をもつて

しても、まださすがに自信がない。考えることの嫌いな彼は、

イライラしてくると、いつも独り駿馬を駆つて曠野に飛び出す。

秋天一碧の下、嘎々と蹄の音を響かせて草原となく丘陵となく

狂気のように馬を駆けさせる。何十里かぶつとばした後、馬も

人もようやく疲れてくると、高原の中の小川を求めてその澗に

下り、馬に飲かう。それから己は草の上に仰向けにねころんで

快い疲労感にウツトリと見上げる碧落へきらくの潔きよさ、高さ、広さ。あ  
あ我もと天地間の一粒いちりゆうし子のみ、なんぞまた漢こと胡ことあらんやと  
ふとそんな気のすることもある。一しきり休むとまた馬またに跨またが  
り、がむしやらに駈かけ出す。終日乗り疲れ黄雲こううんが落暉らつきに曠くんずる  
ころになつてようやく彼は幕營ぼくえいに戻る。疲労だけが彼のただ一  
つの救いなのである。

司馬遷しばせんが陵りょうのために弁じて罪をえたことを伝える者があつた。

李陵は別にありがたいとも気の毒だとも思わなかつた。司馬遷  
とは互いに顔は知つてゐるし挨拶あいさつをしたことはあつても、特に  
交を結んだというほどの間柄ではなかつた。むしろ、厭いやに議論  
ばかりしてうるさいやつだからいにか感じていなかつたので  
ある。それに現在の李陵は、他人の不幸を実感するには、あま  
りに自分一個の苦しみと闘たたかうのに懸命であつた。よけいな世話

とまでは感じなかつたにしても、特に済まないと感じることがなかつたのは事実である。

初め一概に野卑やひこつけい滑稽うつつとしか映らなかつた胡地こちの風俗が、しかし、その地の實際の風土・氣候等を背景として考えてみるとけつして野卑でも不合理でもないことが、しだいに李陵にのみこめてきた。厚い皮革製の胡服こふくでなければ朔北さくほくの冬は凌しのげないし、肉食でなければ胡地の寒冷に堪たえるだけの精力を貯たくわえることができない。固定した家屋を築かないのも彼らの生活形態から来た必然で、頭から低級と貶けなし去るのは当たらない。漢人のふうをあくまで保たもとうとするなら、胡地の自然の中での生活は一日といえども続けられないのである。

かつて先代の且鞮侯单于そていこうぜんうの言つた言葉を李陵りりようは憶おぼえている。

漢の人間が二言めには、己おのが国を礼儀の国といい、匈奴きょうどの行ないをもつて禽獸きんじゅうに近いと看做みなすことを難じて、单于は言つた。漢人のいう礼儀とは何ぞ？ 醜いことを表面だけ美しく飾り立てる虚飾いついの謂ではないか。利を好み人を嫉ねたむこと、漢人と胡人こじんといずれかはなはだしき？ 色に耽ふけり財を貪むさぼること、またいずれかはなはだしき？ 表うわべを剥はぎ去れば畢竟ひつきようなんらの違いはなはず。ただ漢人はこれをごまかし飾ることを知り、我々はそれを知らぬだけだ、と。漢初こつにく以来の骨肉相喰あひむ内乱や功臣連の排斥はいせき擠陥せいかんの跡を例に引いてこう言われたとき、李陵はほとんど返す言葉に窮した。実際、武人ぶじんたる彼は今までにも、煩瑣はんさな礼のための礼に対して疑問を感じたことが一再ならずあつたからである。たしかに、胡俗こぞくの粗野そやな正直さのほうが、美名の影に隠れた漢人の陰險いんげんさより遙はるかに好ましい場合がしばしばあると

思つた。諸夏しよかの俗を正しきもの、胡俗こぞくを卑しきものと頭から決めてかかるのは、あまりにも漢人的な偏見ではないかと、しだいに李陵にはそんな気がしてくる。たとえば今まで人間には名のほかに字あざながなければならぬものと、ゆえもなく信じ切つていたが、考えてみれば字が絶対に必要だという理由はどこにもないのであつた。

彼の妻はすこぶる大人おとなしい女だつた。いまだに主人の前に出るとおずおずしてろくに口も利きけない。しかし、彼らの間にできた男の児は、少しも父親を恐れないで、ヨチヨチと李陵の膝ひざに匍はいあ上がつて来る。その児の顔に見入りながら、数年前長安ちやうあんに残してきた——そして結局母や祖母とともに殺されてしまった——子供の倂おもかげをふと思いうかべて李陵は我おぼしらず慥然ぶぜんとするのであつた。

陵が匈奴に降るよりも早く、ちょうどその一年前から、漢の  
中郎将蘇武が胡地に引留められていた。

元来蘇武は平和の使節として捕虜交換のために遣わされたの  
である。ところが、その副使某がたまたま匈奴の内紛に關係した  
ために、使節団全員が囚えられることになつてしまつた。单于  
は彼らを殺そうとはしないで、死をもつて脅かしてこれを降ら  
しめた。ただ蘇武一人は降服を肯んじないばかりか、辱しめを  
避けようと自ら劍を取つて己が胸を貫いた。昏倒した蘇武に対  
する胡醫の手当てというのがすこぶる変わつていた。地を掘つ  
て坎をつくり熅火を入れて、その上に傷者を寝かせその背中を  
踏んで血を出させたと漢書には誌されている。この荒療治のお  
かげで、不幸にも蘇武は半日昏絶したのちにまた息を吹返した。

且鞮侯单于是すつかり彼に惚れ込んだ。数旬のちようやく蘇武の身体が恢復すると、例の近臣衛律をやつてまた熱心に降をすすめさせた。衛律は蘇武が鉄火の罵詈に遭い、すつかり恥をかいて手を引いた。その後蘇武が窖の中に幽閉されたとき旃毛を雪に和して喰いもつて飢えを凌いだ話や、ついに北海（バイカル湖）のほとり人なき所に徙されて牡羊が乳を出さば帰るを許さんと言われた話は、持節十九年の彼の名とともに、あまりにも有名だから、ここには述べない。とにかく、李陵が悶々の余生を胡地に埋めようとようやく決心せざるを得なくなつたころ、蘇武は、すでに久しく北海のほとりで独り羊を牧していたのである。

李陵にとつて蘇武は二十年来の友であつた。かつて時を同じゆうして侍中を勤めていたこともある。片意地でさばけないとこ

ろはあるにせよ、確かにまれに見る硬骨の士であることは疑いないと陵は思っていた。天漢元年に蘇武が北へ立つてからまもなく、武の老母が病死したときも、陵は陽陵ようりやうまでその葬を送った。蘇武の妻が良人おっとのふたたび帰る見込みなしと知って、去つて他家に嫁かした噂うわさを聞いたのは、陵の北征出發直前のことであつた。そのとき、陵は友のためにその妻の浮薄をいたく憤つた。

しかし、はからずも自分が匈奴きやうどに降くだるようになってからのちは、もはや蘇武に会いたいとは思わなかつた。武が遙はるか北方に遷うつされていて顔を合わせずに済むことをむしろ助かつたと感じていた。ことに、己おのれの家族が戮りくせられてふたたび漢に戻る氣持を失つてからは、いつそうこの「漢節を持した牧羊者」との面接を避けたかつた。

狐鹿姑单于ころくこぜんうが父あとの後を嗣ついでから数年後、一時蘇武が生死不

明との噂うわさが伝わった。父単于がついに降服させることのできなかつたこの不屈の漢使の存在を思出した狐鹿姑単于は、蘇武の安否を確かめるとともに、もし健在ならば今一度降服を勧告するよう、李陵に頼んだ。陵が武の友人であることを聞いていたのである。やむを得ず陵は北へ向かった。

姑且水こじよすいを北さかのぼに溯しつきよすいり郅居水との合流点からさらに西北に森林地帯を突切る。まだ所々に雪の残っている川岸を進むこと数日、ようやく北海ほっかいの碧あおい水が森と野との向こうに見え出したころ、この地方の住民なる丁靈族ていれいぞくの案内人は李陵の一行を一軒の哀れな丸太小舎ごやへと導いた。小舎の住人が珍しい人声に驚かされて、弓矢を手に表へ出て来た、頭から毛皮を被かぶつた鬚ひげぼうぼうの熊くまのような山男の顔の中に、李陵がかつての移中既監蘇子卿いちゆうきゆうかんそしけいの弟おもかげを見出してからも、先方がこの胡服こふくの大官を前さきの騎都尉李少卿きといるしやうけい

と認めるまでにはなおしばらくの時間が必要であつた。蘇武のほうでは陵が匈奴に事えていることも全然聞いていなかつたのである。

感動が、陵の内に在つて今まで武との会見を避けさせていたものを一瞬圧倒し去つた。二人とも初めほとんどものが言えなかつた。

陵の供廻りどもの穹廬がいくつつか、あたりに組立てられ、無人の境が急に賑やかになつた。用意してきた酒食がさつそく小舎に運び入れられ、夜は珍しい歓笑の聲が森の鳥獸を驚かせた。滞在は数日に互つた。

己が胡服を纏うに至つた事情を話すことは、さすがに辛かつた。しかし、李陵は少しも弁解の調子を交えずに事実だけを語つた。蘇武がさりげなく語るその数年間の生活はまったく慘憺た

るものであつたらしい。何年か以前に匈奴の於※王おけんおうが獵をする  
とてたまたまここを過ぎ蘇武に同情して、三年間つづけて衣服  
食糧等を給してくれたが、その於※王6の死後は、凍いてついた大地  
から野鼠のねずみを掘出して、飢えを凌しのがなければならぬ始末だと言  
う。彼の生死不明の噂うわさは彼の養つていた畜群ひやうとうが剽盗ひょうとうどものため  
に一匹残らずさらわれてしまったことの訛伝かでんらしい。陵は蘇武  
の母の死んだことだけは告げたが、妻が子を棄すてて他家へ行つ  
たことはさすがに言えなかつた。

この男は何を目あてに生きているのかと李陵は怪しんだ。い  
まだに漢に帰れる日を待ち望んでいるのだろうか。蘇武の口う  
らから察すれば、いまさらそんな期待は少しももっていないよう

5 「革十干」 49-11

6 「革十干」 49-12

である。それではなんのためにこうした惨憺たる日々をたえ忍んでいるのか？ 单于ぜんうに降服を申出れば重く用いられることは請合うけあいだが、それをする蘇武そぶでないことは初めから分り切っている。陵の怪しむのは、なぜ早く自ら生命を絶たないのかという意味であつた。李陵りりょう自身が希望のない生活を自らの手で断ち切りえないのは、いつのまにかこの地に根を下して了しまつた数々の恩愛や義理のためであり、またいまさら死んでも格別漢のために義を立てることにけいらいもならないからである。蘇武の場合は違ふ。彼にはこの地での係累けいらいもない。漢朝に対する忠信という点から考えるなら、いつまでも節旄せつぼうを持して曠野こうやに飢えるのと、ただちに節旄を焼いてのち自ら首刎はねるのとの間に、別に差異はなさそうに思われる。はじめ捕えられたとき、いきなり自分の胸を刺した蘇武に、今となつて急に死を恐れる心が萌きざしたとは考

えられない。李陵は、若いころの蘇武の片意地を——滑稽なくらい強情な瘦我慢やせがまんを思出した。单于ぜんうは栄華を餌えに極度の困窮こんきゆうの中から蘇武を釣つろうと試みる。餌につられるのはもとより、苦難たに堪ええずして自ら殺すこともまた、单于に（あるいはそれによつて象徴される運命に）負けることになる。蘇武はそう考えているのではなからうか。運命と意地の張合いしやうしをしているよくな蘇武の姿が、しかし、李陵には滑稽や笑止しやうしには見えなかつた。想像を絶した困苦・欠乏・酷寒・孤独を、（しかもこれから死に至るまでの長い間を）平然と笑殺していかせるものが、意地だとすれば、この意地こそは誠まことに凄すさまじくも壮大なものと言わねばならぬ。昔の多少は大人おとなげなく見えた蘇武の瘦我慢やせがまんが、かかる大我慢にまで成長しているのを見て李陵は驚嘆した。しかもこの男は自分の行ないが漢にまで知られることを予期してい

ない。自分がふたたび漢に迎えられることはもとより、自分がかかる無人の地で困苦と戦いつつあることを漢はおろか匈奴きょうどの単于にさえ伝えてくれる人間の出て来ることをも期待していなかった。誰にもみとられずに独り死んでいくに違いないその最後の日に、自らみずか顧みて最後まで運命を笑殺しえたことに満足して死んでいこうというのだ。誰一人おの己が事蹟じせきを知ってくれなくともさしつかえないというのである。李陵りりやうは、かつて先代単于ぜんうの首を狙ねらいながら、その目的を果たすとも、自分がそれをもつて匈奴きょうどの地を脱走しえなければ、せつかくの行為が空むなしく、漢にまで聞こえないであろうことを恐れて、ついに決行の機を見出しえなかった。人に知られざることを憂えぬ蘇武そぶを前にして、彼はひそかに冷汗の出る思いであつた。

最初の感動が過ぎ、二日三日とたつうちに、李陵の中にやはり一種のこだわりができてくるのをどうすることもできなかつた。何を語るにつけても、己おのれの過去と蘇武のそれとの対比がいちいちひつかかってくる。蘇武は義人ぎじん、自分は売国奴ばいこくどと、それほどハッキリ考えはしないけれども、森と野と水との沈黙によつて多年の間鍛え上げられた蘇武の厳きびしさの前には己の行為に対する唯一の弁明であつた今までのわが苦悩のごときは一溜りひとたまもなく圧倒されるのを感じないわけにいかない。それに、気のせいか、日ひにちが立つにつれ、蘇武の己に対する態度の中に、何か富者が貧者に対するときのような——己の優越を知つたうえで相手に寛大であろうとする者の態度を感じはじめた。どこもハッキリはいえないが、どうかした拍子ひょうしにひよいとそういうものの感じられることがある。縊ぼろ縊をまとうた蘇武の目の中に、

ときとして浮かぶかすかな憐愍れんびんの色を、豪奢ごうしゃな貂裘ちようぎゆうをまとうた  
右校王李陵はなによりも恐れた。

十日ばかり滞在したのち、李陵は旧友に別れて、悄然しようぜんと南へ  
去った。食糧衣服の類は充分に森の丸木小舎ごやに残してきた。

李陵は单于ぜんうからの依嘱いしよくたる降服勧告についてはどうとう口を  
切らなかつた。蘇武そぶの答えは問うまでもなく明らかであるもの  
を、何もいまさらそんな勧告によつて蘇武をも自分をも辱はずかしめる  
には当たらないと思つたからである。

南に帰つてからも、蘇武の存在は一日も彼の頭から去らなかつ  
た。離れて考えるとき、蘇武の姿はかえつていつそうきびしく  
彼の前に聳そびえているように思われる。

李陵自身、匈奴きようどへの降服という己おのれの行為をよしとしているわ  
けではないが、自分の故国につくした跡と、それに対して故国

の己に酬むくいたところとを考ふるなら、いかに無情な批判者といえども、なお、その「やむを得なかつた」ことを認めるだろうとは信じていた。ところが、ここに一人の男があつて、いかに「やむを得ない」と思われる事情を前にしても、断じて、自らにそれは「やむを得ぬのだ」という考えかたを許そうとしないのである。

飢餓も寒苦も孤独の苦しみも、祖国の冷淡も、己の苦節がついに何人にも知られないだらうというほとんど確定的な事実も、この男にとつて、平生の節義を改めなければならぬほどのやむを得ぬ事情ではないのだ。

蘇武の存在は彼にとつて、崇高な訓誡くんかいでもあり、いらだたしい悪夢でもあつた。ときどき彼は人を遣つかわして蘇武の安否を問わせ、食品、牛羊、絨氈じゅうせんを贈つた。蘇武をみたい気持と避けた

い気持とが彼の中で常に闘っていた。

数年後、今一度李陵は北海のほとりの丸木小舎を訪ねた。そのとき途中で雲中の北方を成る衛兵らに会い、彼らの口から、近ごろ漢の辺境では太守以下吏民が皆白服をつけていることを聞いた。人民がことごとく服を白くしているとあれば天子の喪に相違ない。李陵は武帝の崩じたのを知った。北海の澗に到つてこのことを告げたとき、蘇武は南に向かつて号哭した。慟哭数日、ついに血を嘔くに至つた。その有様を見ながら、李陵はしだいに暗く沈んだ気持になつていった。彼はもちろん蘇武の慟哭の真摯さを疑うものではない。その純粋な烈しい悲嘆には心を動かされずにはいられない。だが、自分には今一滴の涙も泛んでこないのである。蘇武は、李陵のように一族を戮せられ

ることこそなかつたが、それでも彼の兄は天子の行列にさいしてちよつとした交通事故を起こしたために、また、彼の弟はあつて犯罪者を捕ええなかつたことのために、ともに責を負うて自殺させられている。どう考えても漢の朝ちやうから厚遇されていたとは称しがたいのである。それを知つてのうえで、今日の前に蘇武の純粹な痛哭つうこくを見ているうちに、以前にはただ蘇武の強烈な意地とのみ見えたものの底に、実は、譬たとえようもなく清冽せいれつな純粹な漢の国土への愛情（それは義とか節とかいう外から押しつけられたものではなく、抑おさえようとして抑えられぬ、こんこんと常に湧わき出る最も親身な自然な愛情）が湛たえられていることを、李陵ははじめて発見した。

己おのれ自身おのれに対する暗い懷疑に迫いやられざるをえないのである。

蘇武そぶの所から南へ帰つて来ると、ちようど、漢からの使者が到着したところであつた。武帝ぶていの死と昭帝しょうていの即位とを報じてかたがた当分の友好関係を——常に一年とは続いたことのない友好関係だつたが——結ぶための平和の使節である。その使としてやつて来たのが、はからずも李陵りりようの故人・隴西ろうせいの任立政じんりつせいら三人であつた。

その年の二月武帝が崩じて、僅わずか八歳の太子弗陵ふつりようが位を嗣つぐや、遺詔いじようによつて侍中奉車都尉霍光かくこうが大司馬大將軍だいしばとして政まつりごとを輔たすけることになつた。霍光はもと、李陵と親しかつたし、左將軍となつた上官桀じようかんけつもまた陵の故人であつた。この二人の間に陵を呼返そうとの相談ができ上がったのである。今度の使いにわざわざ陵の昔の友人が選ばれたのはそのためであつた。

单于ぜんうの前で使者の表向きの用が済むと、盛んな酒宴が張られる。いつもは衛律えいりつがそうした場合の接待役を引受けるのだが、今度は李陵の友人が来た場合とて彼も引張り出されて宴につらなつた。任立政は陵を見たが、匈奴きょうどの大官連の並んでいる前で、漢に帰れとは言えない。席を隔てて李陵を見ては目配せをし、しばしば己おのれの刀環とうかんを撫なでて暗にその意を伝えようとした。陵はそれを見た。先方の伝えんとするところもほぼ察した。しかし、いかなるしぐさをもつて応こたえるべきかを知らない。

公式の宴が終わつた後で、李陵・衛律らばかりが残つて牛酒と博戯ぼくぎとをもつて漢使をもてなした。そのとき任立政が陵に向かつて言う。漢ではいまや大赦令たいしやれいが降り万民は太平の仁政じんせいを楽たしんでいる。新帝はいまだ幼少のこととて君が故旧たる霍子孟かくしもう・上官少叔じょうかんしやうしゆくが主上たすを輔けて天下の事を用いることとなつたと。

立政は、衛律えいりつをもつて完全に胡人こじんになり切つたものと見做みなして——事實じじつそれに違ちがひなかつたが——その前では明らさまに陵に説くのを憚はばかつた。ただ霍光かくこうと上官桀じょうかんけつとの名を挙あげて陵の心を惹ひこうとしたのである。陵は黙もくして答えない。しばらく立政りつせいを熟視じゆくしてから、己おのが髪を撫なでた。その髪も椎結ついきいとてすでに中国のふうではない。ややあつて衛律が服を更かへるために座を退いた。初めて隔へてのない調子で立政が陵の字あざなを呼んだ。少卿しょうけいよ、多年の苦しみはいかばかりだったか。霍子孟かくしもうと上官少叔じょうかんしょうしゆくからよろしくとのことであつたと。その二人の安否を問返す陵のよそよそしい言葉におつかぶせるようにして立政がふたたび言つた。少卿よ、帰つてくれ。富貴ふうきなどは言うに足りぬではないか。どうか何もいわずに帰つてくれ。蘇武そぶの所から戻つたばかりのこととて李陵も友の切なる言葉に心が動かぬではない。しかし、考

えてみるまでもなく、それはもはやどうにもならぬことであつた。「帰るのは易い。だが、また辱しめを見るだけのことではな  
いか？ 如何？」言葉半ばにして衛律が座に還つてきた。二人  
は口を噤んだ。

会が散じて別れ去るとき、任立政はさりげなく陵のそばに寄ると、低声で、ついに帰るに意なきやを今一度尋ねた。陵は頭を横にふつた。丈夫ふたたび辱めらるるあたわずと答えた。その言葉がひどく元気のなかつたのは、衛律に聞こえることを懼れたためではない。

後五年、昭帝の始元六年の夏、このまま人に知られず北方に窮死すると思われた蘇武が偶然にも漢に帰れることになつた。漢の天子が上林苑中で得た雁の足に蘇武の帛書がついていた云々

というあの有名な話は、もちろん、蘇武そぶの死を主張する单于ぜんうを説破せつするためのでたらめである。十九年前蘇武に従つて胡地こちに来た常恵じょうけいという者が漢使に遭つて蘇武の生存を知らせ、この嘘うそをもつて武を救出すくいだすように教えたのであつた。さつそく北海ほっかいの上に使いが飛び、蘇武は单于の庭ていにつれ出された。李陵りりょうの心はさすがに動揺した。ふたたび漢に戻れようと戻れまいと蘇武の偉いさに変わりはなく、したがつて陵の心の筈しもとたるに変わりはないに違ちがひないが、しかし、天はやつぱり見ていたのだという考かんえが李陵をいたく打つた。見ていないようである、やつぱり天は見ている。彼は肅然しゆくぜんとして懼おそれた。今でも、己おのれの過去をけつして非なりとは思おもはないけれども、なおここに蘇武という男があつて、無理ではなかつたはずの己の過去をも恥かずかしく思おもはせることを堂々とやつてのけ、しかも、その跡が今や天下てんかに顕彰けんしょう

されることになったという事実は、なんとしても李陵にはこたえた。胸をかきむしられるような女々しい己の気持が羨望ではないかと、李陵は極度に惧れた。

別れに臨んで李陵は友のために宴を張った。いいたいことは山ほどあった。しかし結局それは、胡に降ったときの己の志が那邊にあつたかということ。その志を行なう前に故国の一族が戮せられて、もはや帰るに由なくなつた事情とに尽きる。それを言えば愚痴になつてしまう。彼は一言もそれについてはいわなかつた。ただ、宴酣にして堪えかねて立上がり、舞いかつ歌うた。

ばんりをゆきすぎさばくをわたる

径万里兮度沙幕

きみのためしようとなつてきようどにふるう

為君将兮奮匈奴

みちきゆうぜつしじんくだけ  
路窮絶兮矢刃摧

ししゅうほろびなすでおつ  
士衆滅兮名已隳

ろうぼすでにしすおんにむくいんとほつするもまたいづくにかかえらん  
老母已死 雖欲報恩 将安帰

歌つているうちに、声が顫え涙が頬を伝わつた。女々しいぞ  
と自ら叱りながら、どうしようもなかつた。  
蘇武は十九年ぶりで祖国に帰つて行つた。

司馬遷はその後も孜々として書き続けた。

この世に生きることをやめた彼は書中の人物としてのみ生きて  
いた。現実の生活ではふたたび開かれることのなくなつた彼の  
口が、魯仲連の舌端を借りてはじめて烈々と火を噴くのである。  
あるいは伍子胥となつて己が眼を抉らしめ、あるいは藺相如と

なつて秦王を叱し、あるいは太子丹となつて泣いて荊軻を送つた。楚の屈原の憂憤を叙して、そのままに汨羅に身を投ぜんとして作るところの懷沙之賦を長々と引用したとき、司馬遷にはその賦がどうしても己自身の作品のごとき気がしてしかたがなかつた。

稿を起こしてから十四年、腐刑の禍に遭つてから八年。都では巫蠱の獄が起こり戻太子の悲劇が行なわれていたころ、父子相伝のこの著述がだいたい最初の構想どおりの通史がひととおりでき上がった。これに増補改刪推敲を加えているうちにまた数年がたつた。史記百三十卷、五十二万六千五百字が完成したのは、すでに武帝の崩御に近いころであつた。

列伝第七十太史公自序の最後の筆を擱いたとき、司馬遷は几に凭つたまま惘然とした。深い溜息が腹の底から出た。目は庭

前の槐樹えんじゆの茂みに向かつてしばらくはいたが、実は何ものをも見ていながつた。うつろな耳で、それでも彼は庭のどこからか聞こえてくる一匹の蟬せみの声に耳をすましているようにみえた。歎よろこびがあるはずなのに気の抜けた漠然ぼくぜんとした寂しき、不安のほううがが先に来た。

完成した著作を官に納め、父の墓前にその報告をするまではそれでもまだ気が張っていたが、それらが終わると急に酷ひどい虚脱ひどの状態が来た。憑依ひよういの去つた巫者ふしやのように、身も心もぐつたりとくずおれ、まだ六十を出たばかりの彼が急に十年も年をとつたように耄ふけた。武帝の崩御ほうぎよも昭帝の即位もかつてのさきの太史令たいしれい司馬遷しほせんの脱殻ぬけがらにとつてはもはやなんの意味ももたないように見えた。

前に述べた任立政じんりつせいらが胡地こちに李陵りりようを訪ねて、ふたたび都に戻つ

て来たころは、司馬遷はすでにこの世に亡なかった。

蘇武そぶと別れた後の李陵については、何一つ正確な記録は残されていない。元平元年げんぺいに胡地こちで死んだということのほかは。

すでに早く、彼と親しかつた狐鹿姑单于ころくこぜんうは死に、その子壺衍鞬こえんてい单于の代となつていたが、その即位にからんで左賢王さけんおう、右谷蠡王うろくりおうの内紛があり、閼氏えんしや衛律えいりつらと対抗して李陵も心ならずも、その紛争にまきこまれたろうことは想像かたに難くない。

漢書かんじよの匈奴伝きやうどでんには、その後、李陵の胡地で儲けた子が烏籍都尉うせきといを立てて单于とし、呼韓邪单于こかんやぜんうに対抗してついに失敗した旨が記されている。宣帝せんていの五鳳二年ごほうのことだから、李陵が死んでからちようど十八年めにあたる。李陵の子とあるだけで、名前は記されていない。

李陵

李陵

底本：「李陵・山月記・弟子・名人伝」角川文庫、角川書店  
1968（昭和 43）年 9 月 10 日改版初版発行  
1998（平成 10）年 5 月 30 日改版 52 版発行

入力：佐野良二

校正：松永正敏

2001 年 3 月 14 日公開

2005 年 11 月 1 日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫  
(<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作  
にあたったのは、ボランティアの皆さんです。